

2014년 11월 11일

정리 (11월) 311

(1) 정리의 정리

정리의 정리

정리의 정리

정리의 정리

정리의 정리

정리의 정리

p.107

p.33, p.34, p.35, p.36, p.37, p.39

~~p.27 ~ 44~~

1941(昭和16)・1942(昭和17)年の2年間は、物資不足のため、文部省が検定教科書のうちから各学科5種以内を選定するという「5種選定」が実施された。中学校の選定教科書は、算術代数・数学・代数・幾何・幾何三角など19点で、その著者は次のとおりである。竹内端三、阿部八代太郎、掛谷宗一、東京高等師範学校附属中学校数学研究会、広島高等師範学校附属中学校数学研究会。高等女学校の選定教科書は14点で、著者は渡辺孫一郎、佐藤良一郎、国枝元治・中沢伊興吉、中川銓吉、園正造であった。なお、実業学校はその特殊性から11点が選定され、その著者は9名(グループ)で、松本敏三、岡田良知・森本清吾、鍋島信太郎、岩付寅之助、大阪工業数学研究会、高木貞治、竹内端三(昭和17年だけ:工業教育振興会、中川銓吉)であった。これらの著者による教科書は、当時よく使われていた教科書を反映していたものと思われる。

1943(昭和18)年には、検定教科書の著者は中等学校教科書株式会社と実業学校教科書株式会社の2社だけになった。実際の著者は、中学校・実業学校は、杉村欣次郎(東京文理大学教授:数学)、田中良運(東京高等師範学校附属中学校教

諭)、和田義信(文部省図書監修官)、島田茂(東京高等師範学校附属中学校教諭)、黒田孝郎(東京物理学校教授)であり、高等女学校用の著者は、清水辰次郎(大阪帝国大学教授:数学)、前田光(大阪府立大手前高等女学校嘱託)、石谷茂(大阪帝国大学副手)らであった。なお、中学校・高等女学校用とも、1種検定教科書には、5年制用と4年制用とがある。また、このときの師範学校の教科書の著者は戸田清(広島高等師範学校教授)である。この時期から中学校の教科書の著者は、一人の大学の数学者の手から離れ、大学の数学者と学校の数学教師の集団となるのが当たり前となってきた<sup>8)</sup>。

### 3. 国定期の著者

教科書は検定期を経て、国定期に入る。この時期は、小学校は1903(明治36)年の「小学校令」改

(2) 中学校

中学校では1944(昭和19)年に国定教科書となったが、それは前年の検定教科書を修正したものである。修正した人物は定かではないが、前年の検定教科書を作成した杉村欣次郎(東京文理大学教授)、田中良運(東京高等師範学校附属中学校教諭)、和田義信(文部省図書監修官)、及び、丸山俊朗(文部省図書監修官)と思われる。

終戦後の1945(昭和20)年の墨塗り教科書及び1946(昭和21)年の暫定教科書は、1943(昭和18)年の検定教科書と1944(昭和19)年の国定教科書を底本にして削除・作成されたものである。この削除には、東京文理科大学・高等師範学校附属中学校関係者の佐藤良一郎、宮崎勝弉が加わっている<sup>13)</sup>。最終的には、文部省の和田義信、丸山俊朗らが行ったと思われる。

1947(昭和22)年度から新制中学校が発足し、1947年の文部省著作でC I Eに認可された『中等数学』が使われた。主な著者は、文部省の和田義信、丸山俊朗らと思われる。

1949(昭和24)年には文部省から『中学生の数学』(いわゆる、単元学習の教科書)の1学年用が

2冊発行された。この教科書は、「企画」は和田義信(文部省)、「原案」は飛岡正治、川口延、館暢、高橋運宜、土屋正夫、鶴賀伊奈夫、山内文逸、松田道雄、松岡元久、小西勇雄、佐藤長治郎、「編集」は和田義信(文部省)、川口延、中島健三(文部省)、松岡元久、小西勇雄、小松直行、島田茂(文部省)であった。結局、これら2

種の教科書は、その後民間から発行された検定教科書とともに1952(昭和27)年度まで使われた。

### (3) 主な著作者

#### 1) 小学校用

国定第1期の編集を担当したのは、飯島正之助であり、飯島は、東京大学を出て第一高等学校教授となっていた。文部省では、図書監修官の中村兎茂吉がその任に当たった。中村については、理科の国定教科書の編集で有名である。ここでは、国定第5期以降の主な著作者についてまとめておくことにする。

#### ① 塩野直道

1898(明治31)年に島根県で生まれ、1922(大正11)年に東京帝国大学理学部物理学科卒業後、松本高等学校教授を経て、1925(大正14)年に文部省図書監修官に就任した。そして、昭和初年に『尋常小学算術』(いわゆる緑表紙教科書)を中心と

なって編纂した。ここでは「数理思想の開発」が特徴的である。その後、1942(昭和17)年には、文部省図書局第二編集課長に就任し、中学校数学科の『数学 第一類・第二類』、理科『物象』などの編集にも関係した。なお、要目に列挙されている内容は、学習したあとのカスのようなものであり、その精神こそ学ぶべきであるとした「要目カス論」は有名である。その後、1945(昭和20)年に金沢高等師範学校長に就任し、そこで終戦を迎えた。戦後、公職追放になり、その間に書いた『数学教育論』(啓林館、1947)は戦後初めてのまとまった数学教育論として有名である。復帰後は、啓林館に入社し、小中学校の算数・数学の教科書編集に力を注いだ。1969(昭和44)年に死去。

【主な著書】数学教育論(啓林館、1947)、算数・数学教育論(啓林館、1961)、数学教育革新のために(啓林館、1964)【参考】随流導流(啓林館、

1982) , 日本数学教育学会誌 (以下, 日数教会誌と省略) 第51巻7号

## ②前田隆一

1907(明治40)年に奈良県で生まれ, 1931(昭和6)年に京都帝国大学理学部数学科卒業後, 京都帝国大学副手, 第八高等学校講師・教授を経て, 1940(昭和15)年に文部省図書監修官に就任した。その後, 中学校教授要目『数学 第一類・第二類』の作成に参加したあと, 『カズノホン』の編集に取り組んだ。そこでは「直覚的」な作業を重視した。その後, 高等学校規程の改定にかかわり, 督学官, 科学局教学官, 専門教育局教学官を経て, 海軍司政官となった。戦後, 1949(昭和24)年に吉野書房を創設し, 『新算数教育講座』(1961)など数学教育関係の書籍を発行し, さらに『算数と数学』(教育総合研究所)の発行にかかわり, 大阪書籍に入り, 小中学校の算数・数学の教科書編集に力を注ぎ, 1952(昭和27)年には, 大阪書籍の社

長に就任した。なお, 戦前から図形教育に強い関心を持ち発言を続けてきたが, それらをまとめた『算数教育論』(金子書房, 1979)は図形教育研究の戦後の原点ともなっている。現在は, 大阪書籍相談役となっている。

【主な著書】算数教育論(金子書房, 1979), 全人的人間像の科学論(大阪書籍, 1983), 小・中学校を一貫する初等図形教育への提言(東洋館出版社, 1995) 【参考】数学教育の回顧と展望(国立教育研究所, 1989)

## ③丸山俊朗

1937(昭和12)年に東京文理科大学数学科卒業後, 東京高等師範学校附属中学校教諭を経て, 1941(昭和16)年に文部省図書監修官に就任した。前田隆一の後を受けて, 『初等科算数』の編集を行った。戦中戦後の算数・数学教育を和田義信とともに

に文部省で支えたが、1947(昭和22)年に死去。

#### ④森規矩男

1903(明治36)年(?)に宮崎県で生まれ、宮崎師範学校卒業後、宮崎師範学校附属小学校、田園調布小学校を経て、1940(昭和15)年に文部省に入り、1941(昭和16)年に文部省図書監修官補となり、『カズノホン』、『初等科算数』の編集に加わった。1945(昭和20)年に塩野直道とともに金沢高等師範学校に移り、終戦を迎えた。戦後は、忍岡高等学校教諭を経て、大阪書籍に移り、前田隆一らとともに算数・数学の教科書の編集を行った。1968(昭和43)年に死去。

【参考】算数と数学(総合教育研究所、1968年4月号、1968年8月号)

#### 2)中学校用

中学校では、先に述べたように、国定期間は短かった。そこで、その間の全般にかかわった和田義信についてまとめておく。

#### ①和田義信

1912(明治45)年に富山県で生まれ、1937(昭和12)年に東京文理科大学卒業、東京高等師範学校助手・教授を経て、1943(昭和18)年に文部省図書監修官に就く。中学校の1種検定教科書『数学第一類・第二類』の作成に加わった後、その教科書の中学校国定教科書『数学 第一類・第二類』、戦後の文部省著作教科書『中等数学』、『中学生の数学』の編集にかかわった。戦中・戦後の文部省での算数・数学の国定教科書の作成、学習指導要領の作成等の教育行政を一手に引き受けていた。戦後の算数教育における意味指導の強調の先鞭をつけたと言われている。1953(昭和28)年に東京教育大学助教授に移り、その後、同大学教授となり、日本の数学教育の指導的役割を果たし、1976(昭

和51)年に定年退官。1995(平成8)年に死去。

【主な著作】和田義信著作・講演集(全8巻)(東洋館出版社, 1997予定) 【参考】日数教会誌第78巻3号

#### 4. 戦後の検定期の著作者

戦後の検定期は, 1950(昭和25)年から始まる。しかしながら戦後の検定期は, 戦前の検定期と教科書作成の形態が全く異なっていた。戦前は, これまでに見てきたように個人の著作者が教科書を著すという場合がほとんどであったが, 戦後は, 民間の教科書会社によって構成された学者や数学教育関係者らからなる著作者グループ(編集者, 監修者, 著作者, 執筆者等)が教科書を著し始めたのである。

そこで, 教科書の著作者を把握するために, まず, 戦後に小学校算数科, 中学校数学科の検定教科書を発行したことがある教科書会社を示すと, 小学校教科書16社, 中学校教科書23社で, 次のとおりである<sup>14)</sup>。数字は, 小中学校別の発行年(西暦19XX年)。

日本書籍	: 小50~70年	中51~71年
東京書籍	: 小50~現在	中51~現在
大阪書籍	: 小50~現在	中52~現在
大日本図書	: 小51~現在	中50~現在
中教出版	: 小50~70年	中50~65年
教育図書	: -----	中51~59年
実教出版	: -----	中51, 56~65年
学校図書	: 小50~現在	中51~現在
二葉図書	: 小51~61年	中52~61年
三省堂	: -----	中51~65年
教育出版	: 小55~現在	中52~現在
富山房	: -----	中50~60年
北陸教育書籍	: 小55年	-----
光村図書	: -----	中56~61年
富士教科書	: 小50~59年	-----

国民図書：小51年	中52～54年
広島図書：小51～53年	-----
青雲社：-----	中51～58年
日本書院：-----	中56～68年
啓林館：小52～現在	中54～現在
續文堂出版：小53～55年	中52～64年
学芸出版社：-----	中59～61年
日本文教出版：小61～65年	中62～68年
学研書籍：-----	中62～65年
暁教育図書：-----	中62年
正進社：-----	中62～65年
複式算数研究会：小68～79年	-----

次に、これらの教科書の中から代表的な教科書を選ぶために、戦後の学習指導要領の改訂に合わせて、算数・数学科の教科書の発行時期を「戦後教科書時期区分」によって次の6期に分けた。数字は各期の最初の年(西暦19XX年)。

I期：小46年～	中46年～
II期：小53年～	中53年～
III期：小61年～	中62年～
IV期：小71年～	中72年～
V期：小80年～	中81年～
VI期：小92年～	中93年～

それぞれの期において、最初の時期に発行された教科書の中から、発行部数が多い順に6点の教科書を選択した。6点としたのは、現在の教科書発行社数に合わせたためである。その結果、小中学校とも、東京書籍、大阪書籍、大日本図書、学校図書、教育出版、啓林館、二葉の7社が選択された。ただし、二葉は最初の2期だけであり、教育出版はIII期以降だけである。

これらの教科書は、すべて、著作者グループによって書かれているが、それらの代表的な著作者を、「代表者」、「監修者」、「顧問」という肩書が記されている著作者とすると、次のとおりである。ただし、教科書によっては、必ずしも代表的



な著作者を明記しないことがしばしばあるが、傾向の一端を見ることができるので挙げておく。なお、( )内は期。

東京書籍：小学校 彌永昌吉(Ⅰ～Ⅳ)

三村征雄(Ⅰ～Ⅳ)

小平邦彦(Ⅴ)

古屋茂(ⅤⅥ)

前原昭二(Ⅵ)

中島健三(Ⅵ)

杉山吉茂(Ⅵ)

中学校 彌永昌吉(Ⅰ～Ⅲ)

三村征雄(Ⅰ～Ⅲ)

小平邦彦(ⅤⅥ)

前原昭二(Ⅵ)

藤田宏(Ⅵ)

大阪書籍：小学校 森規矩男(Ⅱ)

前田隆一(ⅡⅥ)

高橋睦男(Ⅵ)

古賀昇一(Ⅵ)

中学校 上林彌四郎(Ⅰ)

浅野啓三(Ⅱ)

小松醇郎(Ⅱ)

前田隆一(Ⅵ)

高橋睦男(Ⅵ)

古賀昇一(Ⅵ)

大日本図書：小学校 末綱恕一(Ⅰ)

中学校 佐藤良一郎(ⅠⅡ)

学校図書：小学校 功力金二郎(Ⅲ)

吉田洋一(Ⅲ)

辻正次(Ⅲ)

戸田清(ⅢⅣ)

田島一郎(Ⅳ)

川口延(ⅢⅣ)

中学校 吉田洋一(Ⅰ)

辻正次(Ⅰ)

二葉図書：小学校 鍋島信太郎(Ⅰ)

中学校 丸山儀四郎(Ⅱ)  
 教育出版：小学校 河口商次(ⅢⅣ)  
                     吉田耕作(Ⅳ)  
                     原弘道(Ⅳ)  
                     宇喜多義昌(Ⅴ)  
                     茂木勇(ⅤⅥ)  
                     片桐重男(Ⅵ)  
 中学校 河口商次(Ⅳ)  
                     吉田耕作(Ⅳ)  
                     原弘道(Ⅳ)  
                     宇喜多義昌(Ⅴ)  
                     茂木勇(ⅤⅥ)  
                     片桐重男(Ⅵ)  
                     澤田利夫(Ⅵ)  
 啓林館： 小学校 中村幸四郎(Ⅰ)  
                     塩野直道(Ⅱ)  
 中学校 塩野直道(Ⅰ～Ⅲ)  
                     正田建二郎(Ⅰ～Ⅳ)  
                     橋本純次(Ⅳ)  
                     栗田稔(Ⅳ)

これら34名のうち3分の2は著名な数学者である。ここでは、このような代表的な著者を含めたすべての著者を対象として分析する。なお本

稿では、著作者とは教科書の最後の頁に明記されている人々だけを指す。

なお、全著作者の職種を、小／中学校別に、次のようにして1つに特定することにした。

1. 大学教員・数学教育学者
2. 大学教員・数学者
3. 大学教員・その他
4. 国立小／中学校教員（国立小／中から公立小／中教員や大学教員になった人も含む）
5. 公立小／中学校教員（公立小／中から私立小／中教員や研究所教員になった人も含む）
6. 私立小／中学校教員
7. その他（高校教員、その他）

そして、原則として教科書の著作者になったときの職種を優先した。例えば、国立小学校教員のときに著作者となり、その後、公立学校長に異動したあとも著作者となっていた人は、本稿の分類上では、最初の職種の国立小学校教員とした。

#### (1) 著作者の全体的な特徴

小学校・中学校の算数科・数学科の教科書の著作者を期数別・職種別にまとめると、表1のとおりである。なお、期数とは、6期のうち何期著作

表1 小学校・中学校の算数科・数学科の教科書の期数別・職種別の著作者数

職 種	小学校算数科の著作者数							中学校数学科の著作者数								
	1 期	2 期	3 期	4 期	5 期	6 期	合 計	1 期	2 期	3 期	4 期	5 期	6 期	合 計		
1. 大学・数学教育学者	54	21	16	2	1		94	28%	52	20	12	3	2	1	90	28%
2. 大学・数学者	22	19	8	5	2		56	16%	41	20	7	6	4		78	25%
3. 大学・その他	5						5	1%	1						1	0%
4. 国立小／中学校教員	29	18	8	4	5		64	19%	22	10	5		7	2	46	14%
5. 公立小／中学校教員	58	21	10	1	1		91	28%	31	8	4		1		44	14%
6. 私立小／中学校教員	4	4	6	1			15	4%	5	2	2				9	3%
7. その他	6	5	3		1		15	4%	36	6	5	1	2		50	16%
合計 名	178	88	51	13	10	0	340名		188	66	35	10	16	3	318名	
%	52	26	15	4	3		100%		59	21	11	3	5	1	100%	

	種類数 需要数	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位	6・7 位
昭34	9社⑩ ※	東書 8.636	啓林館 5.090	学図 ④ 3.850	二葉 ② 3.100	大書 1.888	教出② 中教③ 832 820
36	10社⑪ 23,789	東書 30.3 7.212	啓林館 19.8 4.704	学図 19.3 4.597	二葉 6.9 ② 1.641	大書 6.0 1.420	教出 1.170 中教 950
38	9社⑪ 19,887	東書 30.0 5.977	啓林館 22.0 ② 4.385	学図 19.3 3.853	教出 11.0 2.195	大書 6.0 1.202	中教 744 日書 726
40	8社⑧ 18,535	東書 31.9 5.914	啓林館 30.5 5.655	学図 13.0 2.404	教出 8.3 1.540	大書 7.1 1.319	中教 689 大日本 648
42	8社⑧ 17,686	東書 31.5 5.564	啓林館 30.7 5.434	学図 12.3 2.176	教出 8.8 1.563	大書 7.4 1.301	中教 681 大日本 613
44	9社⑨ 17,577	啓林館 34.9 6.135	東書 25.0 4.400	学図 11.8 2.079	教出 10.0 1.751	大書 8.0 1.410	大日本 693 中教 677
46	7社⑦ 18,117	啓林館 40.1 7.273	東書 23.8 4.313	教出 12.4 2,239	学図 10.7 1,931	大書 7.4 1,340	大日本 842 複式算 178
49	7社⑦ 19,012	東書 32.8 6,243	啓林館 30.2 5,756	教出 10.6 2,024	学図 10.0 1,907	大書 9.8 1,865	大日本 1,093 複式算 123
52	7社⑦ 20,401	東書 35.4 7,223	啓林館 29.2 5,952	教出 10.6 2,170	大書 9.8 2,003	学図 9.0 1,834	大日本 1,142 複式算 77
55	6社⑥ 22,376	東書 30.5 6,816	啓林館 28.3 6,338	学図 15.4 3,445	教出 10.7 2,390	大書 9.7 2,177	大日本 1,210
58	6社⑥ 22,463	東書 32.2 7,225	啓林館 31.1 6,992	学図 13.7 3,087	教出 10.6 2,379	大書 8.6 1,931	大日本 848
61	6社⑥ 20,369	啓林館 33.4 6,784	東書 30.2 6,158	学図 14.6 2,976	教出 10.5 2,141	大書 7.7 1,576	大日本 735
平 1	6社⑥ 18,291	東書 33.1 6,050	啓林館 30.8 5,625	学図 15.0 2,739	教出 9.0 1,643	大書 7.0 1,278	大日本 957
4	6社⑥ 17,081	東書 32.5 5,556	啓林館 32.3 5,510	学図 14.4 2,467	教出 7.9 1,346	大書 7.6 1,298	大日本 904
8	6社⑥ 15,526	啓林館 33.0 5,130	東書 31.5 4,886	学図 14.8 2,300	大書 8.1 1,257	教出 7.4 1,154	大日本 799

(1) 算数は比較的発行者数に変化の少ない科目で、第2期末に二葉、第3期に日書、中教、日文が撤退したのが目立つ程度である。この間、日文は数教協が編集の主体となった教科書を昭和36年度に5学年分発行し、昭和40年度には14千部の採択があったが発行を中止した。また、昭和44年度に複式用算数が発行されたが、54年度までで発行が中止した。

(2) 採択も、当初から東書と啓林館が1・2位を占め、3位以下は学図、教出、大書の順になるという構造が続いている。

種類数 需要数	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位	6・7 位
昭34 17社② ※	啓林館 1.415	二葉 605	学図 540	東書 465	光村 340	教出 ※ 215
36 17社② 7,082	啓林館24.1 1.707	二葉 20.0 ③ 1.423	学図 15.3 ③ 1.084	大書 10.2 720	東書 7.7 546	光村 345 教出 324
38 17社⑨ 7,046	啓林館37.3 2.476	学図 13.1 874	教出 12.9 ② 866	大書 8.8 585	東書 8.3 558	大日本 405 日文 342
40 14社⑮ 6,003	啓林館35.3 2.122	教出 17.8 ② 1.068	学図 12.8 771	東書 8.1 490	大書 6.8 406	大日本 377 日文 303
42 9社⑨ 5,278	啓林館43.3 2.286	東書 18.3 965	学図 12.8 677	教出 10.5 543	大日本 9.1 481	大書 278 日文 23
44 7社⑦ 4,976	啓林館45.0 2.238	東書 18.7 931	学図 13.2 658	教出 10.4 519	大日本 8.1 404	大書 223 日書 6
47 6社⑥ 4,881	啓林館44.0 2.150	東書 22.6 1.104	学図 12.0 586	大日本 9.0 438	教出 7.5 365	大書 238
50 6社⑥ 4,873	啓林館35.4 1.725	東書 30.0 1.461	学図 12.6 616	大日本 8.2 398	大書 7.2 351	教出 322
53 6社⑥ 5,158	啓林館36.7 1.892	東書 30.7 1.585	学図 12.5 646	大書 8.1 416	教出 6.2 319	大日本 301
56 6社⑥ 5,408	啓林館35.9 1.939	東書 31.2 1.688	学図 13.1 708	大書 7.8 421	教出 6.8 370	大日本 282
59 6社⑥ 5,931	啓林館36.5 2.163	東書 28.8 1.706	学図 13.3 791	大書 8.8 522	教出 7.6 450	大日本 298
62 6社⑥ 6,194	啓林館38.1 2.366	東書 27.9 1.738	学図 11.9 739	教出 9.1 565	大書 7.3 455	大日本 341
平2 6社⑥ 5,476	啓林館33.8 2.123	東書 28.1 1.536	学図 11.3 617	教出 8.8 485	大書 6.9 375	大日本 340
5 6社⑥ 4,964	啓林館38.7 1.921	東書 29.2 1.450	学図 10.0 496	大書 8.3 412	教出 7.5 371	大日本 314
9 6社⑥ 4,590	啓林館38.2 1.753	東書 29.9 1.372	学図 10.3 474	大書 8.0 368	教出 7.5 346	大日本 278

- (1) 数学も初期には多くの発行者が参入していたが、その多くは第3期の半ばまでに姿を消し、第4期以降は6社6種類の形が続いている。
- (2) 第3期には第3学年用として「必修」と「必修・選択」の2種類があったが、そのどちらかを使えばよかったので需要部数には影響がない。また「必修」の使用はごくわずかだったので、これを発行しない発行者もあった。
- (3) 当初から啓林館が首位を続けている。第2期までは他の発行者との差は少なかったが、第3期になるとその差が拡大した。第3期半ばに2位に浮上した東書が一時はかなりのところまでこれに肉薄して2位を保っている。学図の3位にも久しく変わりがない。